

私は現代の政治家たちの伝記を読んだことがなかった。ハンガリー生まれのジャーナリストのカティ・マートンが著した『メルケル 世界一の宰相』を興味深く読んだ。世界の多くのリーダーたちは権力を維持するため強権を持って反対勢力を抑え込むか、ポピュリズム（大衆迎合主義）によって国民から人気を得ようとしているかに見える。その中で、メルケルは、理念、哲学を持って歴史を捉え、世界の将来を見据えている。福島原発事故を受けて、原発廃止に舵を切った決断、ユダヤ人を苦しめたナチズムの政策を謝罪して、100万人もの難民を受け入れる姿勢に、人間の尊厳を守ろうとする思想は明確である。

『メルケル』には、生い立ち、経歴、苛烈な闘いの過程が詳細に描かれている。旧東ドイツに住んだこと、牧師の子どもとして成長したことの二つが、彼女の人格と情熱を生み出している。警察国家の東ドイツでの経験から、自由と民主に深く、強い渴望を持ち、それが、彼女の基本的な政治姿勢を形成している。また、厳格な牧師の家庭で育ったことが、彼女の信仰を強固なものにしている。演説では、しばしば、聖書の言葉を引用し、キリスト教信仰に立った姿勢を明らかにしている。首相になった彼女のデスクには「静寂の中にこそ力がある」という言葉を刻んだものが置かれている。イザヤ書30章15節の「立ち帰って落ち着いていれば救われる。静かにして信頼していることにこそ／あなたがたの力がある」からの言葉であろう。彼女は、ヒトラーのような熱狂的な演説やオバマ米国元大統領のような美辞麗句を並べるのではなく、普通の言葉で、物理学者らしく論理的に、人を愛する誠実な語りかけで、相手を説得していった。首相として超多忙な生活であるが、借家住まいで、スーパーに買い物に行く一般人の生活をしている。ドイツの経済力を高め、EU（欧州連合）をリードし、国際社会で最も重い発言をする宰相になった。

『メルケル』は450頁ほどの単行本で多くのことが書かれているが、民主主義と権力主義の対立が取り沙汰されているので、この件に関することから書きたい。メルケルは東ドイツでの監視社会に苦悩していた。首相になってから、ロシアのプーチン大統領とも渡り合わなければならない。二人は虚々実々の駆け引き、喧々諤々の議論をするが、職員をしていたプーチンの手腕を知り抜いたメルケルは一步も引かない。彼女はオバマに「プーチンは、彼が聞きたいことだけを言うおべっか使いしかいない夢の世界に生きているのだから」と言った。独裁者の本質をついているのではないか。

私たちは、米中対立の下、民主国家と強権国家の二分化を見せられている。中国の香港に対する国家支配は横暴である。国の政策に異を唱える者は容赦なく、逮捕し、言葉を奪い、自由と民主は無くなってしまった。ミャンマーでは、軍事政権が暴力をもって、国民を抑え込んでいる。21世紀とは思えない蛮行が横行している。米国は、民主主義を名乗る国々を名指しで招いて「民主主義サミット」を開催した。こんなことをしたら、対立が激化するのではないか。そして、米国も民主主義国家と言えるのかという議論もある。

メルケルは聴衆を魅了するオバマを信用できないと思っていたが、オバマも政治は問題解決のためにあるという認識を持っていることを知り、互いに信頼を深めていった。ところが、スノーデンによって、メルケルの電話が盗聴されていることが暴露された。この時、彼女はオバマに電話をかけ、ドイツ語で「今はもう冷戦の時代ではない。友達が友達をスパイするなどあり得ない」と激怒した。東ドイツで盗聴に苦しんだゆえの怒りである。彼女らしい。しかし、二人は仲直りし、オバマはメルケルに絶大な信頼を寄せている。↓

「戦争より平和、貧困より繁栄のほうがいいし、忌み嫌われるのけ者の国よりも、欧州という共同体メンバーとして敬意を払われる国にいるほうがはるかにいい。」これが、メルケルの政治姿勢で、EUの形成に力を注いできた。ところが、米国で起こったサブプライム危機が、欧州経済も混乱させた。ドイツの被害は少なかったが、ギリシアでは経済が悪化した。この時、メルケルは、ギリシア経済の立て直し、支援をして、EUからの離脱を阻止した。メルケルの忍耐強い交渉が功を奏したと報告している。

また、ロシアはウクライナがEUに引き込まれないように警戒している。この時も、プーチンと平和的に解決しようと超人的な外交交渉をした。著者マートンは、メルケルを「民主主義の守護天使」と評している。

ヒラリー・クリントンは、メルケルと故サッチャー英国元首相を比べ、「メルケルは行動で示し、一方、サッチャーはイメージを重視していました。公の場での言動がサッチャーの人格の大部分を占めています。かたや、メルケルは仕事で自身を表現する。サッチャーはどんな会合にも戦闘態勢で臨んだけれど、メルケルは多くの場合、歩み寄りによって問題の解決策を探ります」と分析している。メルケルのように、異なる意見とも忍耐強く対話し続けることによって、民主主義が醸成されるのではないか。強権国家のように、権力で即決するのではなく、対立する意見にも敬意を払い、合意を得て、決めていくのが、民主主義の基本であると思う。

メルケルは、一人の難民の少女と出会い、彼女の苦悩を知って、心を揺さぶられ、涙ぐんだ。そして、「ドイツは難民を追い返しません」と発言した。「もしヨーロッパが難民問題で落第するようなら、それは我々がなりたいと望むヨーロッパではなりません」と断言した。ナチズムが600万人のユダヤ人を虐殺した、障害者、同性愛者、政敵を抹殺したことへの贖罪の思いが込められているからであろう。彼女の知り合いの神学者は「キリストは常に我々とともにいます。あの決断は、彼女がキリスト教徒として育ったことが一因です。彼女にとってのマルティン・ルターの瞬間だったのです」と評している。生活できず、命の危険があるから、母国を捨て、何百キロも歩き、沈みそうな舟で、他国に移住する難民に心を寄せたのである。しかし、あまりに多い難民はドイツ経済を脅かすようになり、受け入れに反対する勢力も大きくなった。更に、ケルンで複数の女性がレイプされる事件が起こり、その加害者に22名の難民申請手続き段階の人がいることが判明した。国民から、安易な難民受け入れだと批判され、政治生命が危うくなる状態を招いていった。

メルケルにとって、英国のEUからの離脱はショックだった。また、欧州各国でテロが起こり、多くの犠牲者が出た。更に、「米国第一」を唱えるトランプが大統領に選出され、狡猾な交渉人のトランプと地球規模の平和と安定を模索するメルケルの間で、意見の対立が絶えなかった。耐え難い苦悩の年、2016年を送っている。

また、「ドイツのための選択肢(AfD)」という極右政党が議席数を伸ばし、メルケルの難民政策を激しく非難した。彼らは、東ドイツの置き去りにされた政策に不満を募らせていた。メルケルは東ドイツの住民と対話し、自国だけが豊かになればよいのではないと、難民政策の正当性を訴え、彼らの苦勞をねぎらった。更に、コロナ禍に襲われた時、科学者らしい正確な情報と数字で、医療崩壊を避け、国民から多大な支持を得た。

メルケルは16年間、粘り強さ、謙遜さ、慎ましさで、命の尊厳を守り、戦争に反対する政策を貫き、引退した。世界は平和の理念を堅持し得るのであろうかと深く危惧する。